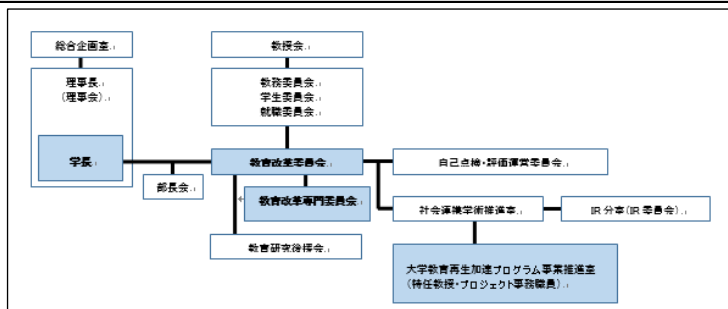


進捗状況の概要（1 ページ以内）

学内の実施体制を右図に示す。学長直属の「教育改革委員会」の下に配置された「教育改革専門委員会」が本事業活動を取り扱っており、「達成度評価（学修成果の可視化）（WG1）」、「卒業時における質保証（人材育成）（WG2）」、「主体的学修（アクティブ・ラーニング）（WG3）」、「授業外学修（e-ラーニング）（WG4）」の4つの



ワーキンググループ(WG)を配置し、各分野における改革を推進している。「大学教育再生加速プログラム事業推進室」は、本事業の推進、達成度評価、システム開発を担いWG1～4に関わっている。

中心となる取組は、「③学びの過程における達成度評価システムの確立」である。ディプロマ・ポリシーの属性である 20 個の修得因子の達成度を追跡、学生が学修過程を振り返り学修改善の方針に付き自己省察できる仕組みを構築する。羅針盤となる教員の教育実践、職務業績を振り返り自己省察し教育改善へと導く仕組みも同時構築する。教育改善を自走させる仕組みも構築する。

取組の成果は、「学修成果の可視化と達成度評価の確立」の作業が到達目標レベルに到った点に要約できる。修得因子への授業、授業外学修取組の貢献、修得因子間相関関係から達成度を見積もることが可能となった。ティーチング・ポートフォリオに職務業績を加えてアカデミック・ポートフォリオを構築、教員の自己省察を律する仕掛けを組み込んだ。学習する組織のポートフォリオとして教職員全員参加型のラーニング・ポートフォリオⅡを開発、チーム学習、共有見解構築の仕掛けを導入した。

補助期間終了後の継続発展に向けた取組に関し、学生に対しては、平成 30 年度学生要覧において、本事業成果としての「八戸工業大学の教育」を特徴付ける「20 の修得因子」、「ラーニング・ポートフォリオⅠ(LPⅠ)システム」を明示し、本学を構成する工学部、感性デザイン学部の 6 学科について、「修得因子と科目」、「学習・到達目標と科目」の繋がりをカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーとして、148 頁の紙数を掛けて明示した。当該要覧を手にした新入生は、補助期間終了後の平成 33 年度に卒業するため本取組が継続発展することは極めて重要と考える。

学内外への波及効果に関し、中間審査年度に当たる平成 29 年度には中間報告書 (<https://www.hi-tech.ac.jp/ap/sub/activity.html#document>) を作成、全国の高等教育機関、高等教育関係者を対象とし、本学単独の中間報告会(日時:平成 29 年 11 月 10 日 10:30~16:30、場所:東京国際交流館メディアセンター)を開催、全国より 85 名の参加者を得て平成 26~29 年度の本事業前半の成果を報告、意見交換を行った。出口調査アンケートによると回答者全員から高い評価を得ることができ波及効果があったとの印象を得た。我が国高等教育の発展に寄与すべく、中間報告会の全容は動画配信 (<https://www.hi-tech.ac.jp/ap/sub/activity.html#events>) している。テーマⅡ・V採択校 共同シンポジウム(日時:平成 30 年 2 月 16 日)ではテーマⅡを代表して本学の事例報告を口頭発表し、さらに取組概要をポスター発表した。日本工学教育協会年次大会では文部科学省補助金事業の成果報告に関わるセッションを設けているが、本学からは本事業に関し「学修の過程を振り返らせる達成度評価の確立と可視化」と題し、平成 28 年度年次大会で 4 件、平成 29 年度年次大会で 4 件の口頭発表を行い高い評価を得ている。平成 30 年度年次大会では 7 件を投稿、採択され、8 月 30 日に名古屋工業大学で成果報告を行う予定である。その他、地区大会発表論文 1 件を含め学会発表報告数は 16 件に到っている。査読付きの学術論文誌「工学教育」66 巻(2018)に本事業成果「修得因子を用いた学修成果の可視化」が掲載済みである。IDE 大学協会の月刊誌「IDE 現代の高等教育」590 巻(2017)は「学修成果の可視化」を特集しているが「八戸工業大学の事例」を報告している。